

博 士 論 文

「知的障害がある子どもを育てる母親の子育て  
エンパワメント質問票」の信頼性・妥当性の検討

指導教員 石井 良和 教授

首都大学東京大学院 人間健康科学研究科  
人間健康科学専攻 作業療法科学域（系）

有吉 正則

2013年9月

## 研究論文

# 知的障害児を育てる母親の 子育てエンパワメント質問票の妥当性の研究

兵庫医療大学リハビリテーション学部 作業療法学科

東京都立保健科学大学保健科学研究科（研究生）

有吉 正則

首都大学東京

山田 孝

**要旨**：知的障害児を育てる母親が，子育て上の心理的危機を乗り越えるための力である主体的な子育て意識の状態を明らかとする質問票の開発を目的に，設問項目の作成とその内容的妥当性を検証した．知的障害児の母親を調査対象とした予備的研究の結果から，母親が子育てへの自信を回復するうえで重要となる16個の概念に対応する設問51項目を独自に作成し，Delphi processに準拠して内容の妥当性を検討した．その結果，最終的に35項目が「同意」のコンセンサスを得たと判断された．本研究により，構成概念妥当性を検討するための設問項目が作成され，質問票開発の可能性が見出された．

**Key Words**：母親指導，知的障害，評価，ヘルスプロモーション

## はじめに

知的障害児の母親をテーマとする近年の研究を見ると、子育ての中で感じる違和感や周囲の理解不足は母親に強い不安や負担感を抱かせ、親としての自信を喪失させてしまうと報告されている<sup>1-3)</sup>。子育てに自信をなくした親がその自信を取り戻すこと、いわば子育てエンパワメント (empowerment; 内なる力の回復) を支援するためには何が必要であろうか。

障害児の母親が抱える困難、葛藤は母親個々に表れる固有の現象であるだけに、その実態や対策が十分に論議されず、子ども自身の問題の背後に埋没してしまう懸念があるといわれている<sup>4)</sup>。しかし我が国における知的障害児を育てる親についての研究は、研究の数自体が少なく、実態把握に留まっている研究がほとんどである。そのなかの数少ない「親としての発達」を分析した研究を見ても、健常児の親を調査対象として作成された尺度を用いて分析が行われており、知的障害児の親に特化した心理尺度は開発されていない<sup>5)</sup>。この問題を解決するためには、知的障害児の母親に特化した心理尺度を用いた「子育てエンパワメントに関する状態」を明らかとする質問票 (以下、子育てエンパワメント質問票) の開発が強く望まれる。

筆者はその予備的研究<sup>6)</sup>として、乳児期から就学後までの子育てエンパワメントのプロセスを明らかにすることを目的に、知的障害児の母親 10 名より就学後までの子育ての出来事を聞き取り、語りの内容を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ<sup>7)</sup> に準じて分析した。その結果、母親が子育てへの自信を回復するうえで重要となるカテゴリーとして「母親役割の変遷」、「子育て方針の変化」、「母親間の関係」、「夫婦関係」の 4 テーマに分類される 16 のカテゴリー (以下、概念: 図 1) を生成するとともに、時系列に沿って概念が変遷

するプロセスを提示した。この概念の変遷プロセスこそ、母親が子育て上の心理的危機を乗り越えるための力である“主体的な子育て意識”を高めるプロセスを表わし、知的障害児の親を調査対象として心理尺度の信頼性、妥当性の検証を行い得る設問項目のベースになるものと考えた。

本研究の目的は、母親の主体的な子育て意識の状態を明らかにするための評価法を開発することである。具体的には、知的障害児の母親に特化した主体的な子育て意識を分析するための心理尺度の開発を目的とする。そのために、知的障害児の母親が子育て上の心理的危機を乗り越えるうえで重要となる16の概念を反映する設問項目を作成し、その表面的妥当性と内容的妥当性を検証する。なお、本研究は、首都大学東京健康福祉学部研究安全倫理委員会の承認(受理番号 05006)を得て実施された。

## 方 法

### 1. 研究対象

設問項目の表面的妥当性の検討は、筆者が在籍する大学院博士後期課程に在籍する9名の作業療法士、および4歳6ヵ月～10歳0ヵ月の知的障害児を育てる母親8名を対象とした。母親8名の平均年齢は32.1歳(標準偏差1.48, 範囲28-36)であった。

設問項目の内容的妥当性の検討は、近畿地区の早期療育通園施設(16施設)で療育を実践している経験年数13年以上の療育スタッフ(作業療法士, 理学療法士, 言語聴覚士, 保育士, 臨床心理士, 看護師, ケースワーカー)のうち、研究への協力に同意を得られた32名を対象者とした。

### 2. 設問項目の作成

概念と設問項目との対応を図るために、予備的研究<sup>6)</sup>のデータから、母親たちの「子育ての出来事の意味」を浮き彫りにする語りを1概念当たり3～5個抜粋して、設問文章の雛形とした。雛形作成後、設問文章が適切に概念を表現しているかを判断するために、筆者が在籍する大学院の指導教官のチェックを受けた。設問項目を削除、精選した結果、設問項目は表1に示すように、4つのテーマ16の概念から成る51項目が作成された。その内訳は、＜母親役割の変遷＞19項目、＜子育て方針の変化＞10項目、＜育児期における母親間の関係＞9項目、＜夫婦関係＞13項目である。

### 3. 設問項目の表面的妥当性の検討

表面的妥当性の検証は、作業療法士を対象とする検討会と知的障害児を育てる母親を対象とする検討会の2段階で行った。検討会では研究対象者に51項目の設問を提示し、各設問項目の語彙・表現の難易度、母親の心情にそぐわない内容の有無についての検討を行った。表面的妥当性の評価は、全対象者の判断が「問題はない」と一致した設問項目はコンセンサスを得たと判断した。

### 4. 設問項目の内容的妥当性の検討

内容的妥当性の検証は3段階からなるDelphi process<sup>8,9)</sup>を用い療育スタッフを対象に行った。第一段階では、表1に示す51項目の設問をランダムな順番に並び替えたアンケートを対象者に郵送し、各設問項目の内容に対する同意の程度を評価して返送してもらった。同意の程度をあらかじめ回答肢は、「同意する」「どちらかといえば同意する」「どちらかといえば同意できない」「同意しない」とした。このうち「同意する」、「どちらかといえば同意する」を「同意群」とし、「どちらかといえば同意できない」「同意しない」を「非同意

群」として収束した。「同意群」「非同意群」を選んだ人数を設問毎に百分率に変換して集計値とした。

第二段階では、第一段階で集計値の「同意群」の合計が 75%以上になった設問項目を除き、アンケートの内容を改訂して、対象者に郵送し、再度、各設問項目の内容に対する同意の程度を評定してもらった。対象者は、示された第一段階のグループ全体の回答結果を参考にして、自分の評定を変える形式をとった。回答肢を選んだ人数を再集計し、コンセンサスを確認した。第三段階は最終的にコンセンサスを得られなかった設問項目に対して、同意を得られなかった理由について各自の考え（以下、コメント）を記載してもらった。

内容的妥当性の評定は、集計値が 75%以上の設問項目はコンセンサスを得たと判断した。「同意群」と「非同意群」の有意差検定には  $\chi^2$  検定を用い、有意水準は 0.05 以下とした。

## 結 果

### 1. 表面的妥当性について

表面的妥当性についての検証結果は、作業療法士、知的障害児を育てる母親ともに 51 項目すべてに問題の指摘はなかった。

### 2. 内容的妥当性について

#### 1) 対象者の人数

第一段階は 2005 年 8 月から 9 月にかけて実施され、研究協力に同意した 32 名中 26 名から有効回答が得られた。対象者の平均経験年数は 20.9 年（標準偏差 4.86、範囲 13-30）であった。第二段階は 2005 年 10 月から 2006 年 3 月にかけて実施され、26 名中 20 名から有効回答が得られた。第三段階は 2006 年 4 月から 8 月にかけて実施され、20 名中 14 名から有効回

答が得られた（表 2）。

## 2) コンセンサスの結果

表 3 は第一段階，表 4 は第二段階の集計値を設問毎に示したものである。第一段階では，51 項目中 32 項目（62%）が同意を得たと判断された。第二段階では，再度評定を求めた 19 項目中 4 項目（21%）に同意を得た。第二段階までに得られた同意のテーマ別内訳は，「母親役割の変遷」は 19 項目中 12 項目の同意（63%），「子育て方針の変化」は 10 項目中 7 項目の同意（70%），「母親間の関係」は 9 項目中 8 項目の同意（89%），「夫婦関係」は 13 項目中 8 項目の同意（62%）であった。その結果，最終的に「同意群」35 項目，「非同意群」1 項目がコンセンサスを得たと判断された。 $\chi^2$  検定の結果，第一段階，第二段階ともにコンセンサスを得た項目の人数の偏りは 1% 水準で有意であり，「合意」の選択には何かしら必然的な理由があることが示された。表 5 には第三段階で得られたコメントから同意しなかった理由の具体例を示した。

## 考 察

### 1. 設問項目としての妥当性について

本研究では，9 名の作業療法士，および知的障害児を育てる 8 名の母親による表面的妥当性の検討の結果，わかりにくい項目，回答しがたい項目はないという回答を得た。これらの結果より，本設問の表面的妥当性は支持されたと考える。

内容的に妥当であるためには，設問項目が概念を偏りなく反映していることが求められる<sup>10,11)</sup>。テーマ間の差は「夫婦関係」の 62% から「母親間の関係」の 89% までと，開きは大きなものではない。コンセンサスを得られた設問は，知的障害児の母親の自己成長感や子育ての中で生じるネガティブな感情の回復に関連すると報告<sup>12~15)</sup>された「人間的成熟と社

会への関心の広がり」,「寛大さと積極性」,「我が子・他者への思いやり」,「周りの人に多く支えられているという認識」の4因子を強く反映する設問文章であると考えられた。以上の結果を鑑みると,概念を反映した設問として「同意群」35項目の内容的妥当性は高いと判断される。しかし,16概念中の概念5,概念9,概念13,概念16に対応する設問が各1項目しか残らなかった点は,構成概念妥当性を検討する際に問題点となり得る事項といえよう。

外的な基準との関連で妥当性を検討する基準関連妥当性については,設問項目を独自に作成しているために検証することはできない。しかし,構成概念妥当性については,概念と測定値の関係を統計的手法によって検討することが可能であると考えられる。よって,妥当性のさらなる検証を進めるためには,「同意群」35項目で構成される質問票(案)を作成し,知的障害児の母親を調査対象に構成概念妥当性の検討を重ねる必要があると思われる。

## 2. コンセンサスを得られなかった設問項目に関わる文法的な働きに関する体系

コメントに着目してみると,非同意の要因は設問文章(以下,書き手)の表現意図に関わる要因(表5のコメントA)と調査対象者(以下,読み手)の解釈に関わる要因(表5のコメントB)に分けられた。表現意図がどのような意図とも解釈できるような文構造,および表現意図が読み手に誤って理解される文構造においては,誤解や書き手が意図していない印象が伝達されてしまう事態を引き起こす可能性が考えられる。

以上の観点から,表現意図と文構造との関係に注目し考察を進める。

### 1) 書き手の表現意図の不明確さ



日本語では主語の省略が頻繁に行われ、単数複数の区別がないといった特徴をもっている。ゆえに、設問の人称代名詞の単数複数表現は、「母親たち」＝「母親」という等式の意で用いた。ところが日本語における複数表現は、言葉を効果的に表現するための修辭法的目的に流用される場合が多く、接尾辞である「たち」、「ら」が、文章全体の趣き、情緒を左右するといわれている<sup>16,17)</sup>。母親たちの心情の伝達が設問意図であることを考えれば、修辭法こそ文構造の要であり、「発言をあれこれイメージして膨らませた」というコメントは、正に「母親」という単数表現では「母親たち」という集団が内包するイメージを読み手へ伝えきれなかったことを表しているといえよう。

日本語では、名詞に複数形を与えるか否かは、全く書き手の随意に任されている点<sup>16)</sup>を考えると、人稱代名詞の単数表現は非同意の要因になったと考えられる。

## 2) 書き手の表現意図と読み手の解釈間のずれ

読み手の解釈に関わる非同意の要因については3つの要因が見出された。第一は、「自分の基準により捉え方が変わった」と表わされた、読み手のもつ知識・経験によって理解内容が左右された点。第二は、「バックグラウンドが見えないので同意するとはいけない」と表わされた、同意には書き手の状況を深く知る必要があった点である。書き手と読み手の間に生活体験、知識、社会通念、感情などの共通地盤が少ない場合には、表現の意図や態度、ニュアンスまで汲み取れないことが指摘されている<sup>18)</sup>。「一般家庭ではよくあること」などは、判断指標となった現代家族に対する読み手の見解が先行し、意図の汲み取りが表層的な理解段階にとどまった感がある。第三は、設問に対する理解体系の差異である。理解体系には、母親の語りに見られた自分と子どもの今の関わりを豊かにしながら、未来へとつなげるポジティブな現在指向系列<sup>6)</sup>と、

「方法論としては迂遠的」、「対立はあっても避けてはいけない」という読み手のコメントにみられた，未来をめざして頑張っていくことに価値を置く未来指向系列が見出された．この書き手と読み手の理解体系の差異が非同意の要因になったと考えられる．

## 本研究の限界と今後の展望

Delphi process において一部の対象者から調査票の回答を得られなかったことは，結果の解釈が限定的であったことを示唆していると思われる．今後は，作成した質問票（案）の設問項目が共通に関連している潜在因子の抽出，各因子と各項目の関連性の深さや再検査信頼性の検討を試み，さらなる妥当性の検証を行いたい．

## 結 論

予備的研究の結果から 16 個の概念に対応する設問 51 項目を独自に作成し， Delphi process に準拠して内容の妥当性を検討した．その結果，最終的に 35 項目が「同意」のコンセンサスを得たと判断され，構成概念妥当性を検討するための設問項目が作成された．コンセンサスを得られた設問項目は，知的障害児の母親としての発達を支えている要因を強く反映するものであると考えられた．コンセンサスを得られなかった設問項目は，設問文章のもつ文法的な働きに起因したものであると考えられた．

以上のことより，コンセンサスを得られた設問項目によって子育てエンパワメント質問票開発の可能性が見出された．

謝 辞:本研究の調査にご協力を頂いた療育通園施設スタッフの皆様，本研究にご助言頂いた東京都立保健科学大学大学院地域保健科学分野博士後期課程の皆様に心より御礼申し上げます。

## 文 献

- 1) 田熊友紀子：発達障害児を持つ母親カウンセリング-母の内なる「障害児性」の癒しと「健常児性」の喪の作業-。文京女子大学紀要 2(1)：127-140，2000.
- 2) 橋本やよい：母親の心理療法-母と水子の物語，日本評論社，東京，2000.
- 3) 泊 祐子，豊永奈緒美：障害児を育てる親の「親となる」意識の発達。岐阜県立看護大学紀要第 6(1)：3-10，2005 .
- 4) 藤原里佐：重度障害児家族の生活-ケアする母親とジェンダー-，明石書店，東京，2006，pp51-69.
- 5) 橋本真規，奥住秀之：障がい児を育てる親の発達に関する文献検討。東京学芸大学紀要総合教育科学系，59：243-253，2008.
- 6) 有吉正則，山田孝：療育支援活動における地域作業療法のあり方に関する研究-知的障害児を育てる母親の役割形成と変遷のプロセスについて-。日本保健科学学会誌，7(4)：285-294, 2005.
- 7) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチ-質的実証研究の再生-，弘文堂，東京，1999，pp7-272.
- 8) Catherine P. Nicholas M (大滝純司 監訳)：質的研究実践ガイド，医学書院，東京，2001，pp44-52.
- 9) Stanford R. Brian M. Fong C: Research Directions Related to Rehabilitation Practice - A Delphi Study-. Journal

of Rehabilitation January/ February/March : 19-26,  
1998.

- 10) 鎌原雅彦, 宮下一博, 大野木裕明, 中澤順 : 心理学マニュアル質問紙法. 北大路書房, 京都, 1998, pp.69-74.
- 11) 松尾太加志, 中村知靖 : 誰も教えてくれなかった因子分析. 北大路書房, 京都, 2002, pp.27-29.
- 12) 奇 恵英 : 障害児をもつ親から学ぶ. 教育と医学 : 47(3) : 19-25, 1999.
- 13) 熊野朋子, 谷村厚子, 三浦咲 : 知的障害児の母親における育児負担感と自己成長について—ソーシャルサポートとの関係から—. 明治学院大学文学研究科心理学専攻紀要 5 : 1-15, 2000.
- 14) 橋本真知子, 佐久間宏 : 障害児を持つ母親の自己成長に関する研究—母親へのアンケート調査を通して—. 宇都宮大学教育学部教育実践センター紀要 27:323-332, 2004.
- 15) 橋本真規, 工藤麻由, 奥住秀之, 津川律子 : 障がい児を育てる親の発達とソーシャルサポートとの関連. 東京学芸大学紀要総合教育科学系 58 : 289-294, 2007.
- 16) 西田直敏, 西田芳子 : 日本語の使い方. 創元社, 大阪, 1992, pp.14-18.
- 17) 飯島栄一 : ベルギー人は肩が凝らない. 創造社, 東京, 2000, pp.131-151, 176-194.
- 18) 町田 健 : ソシユールのすべて. 研究社印刷, 東京, 2004, pp.22-23.

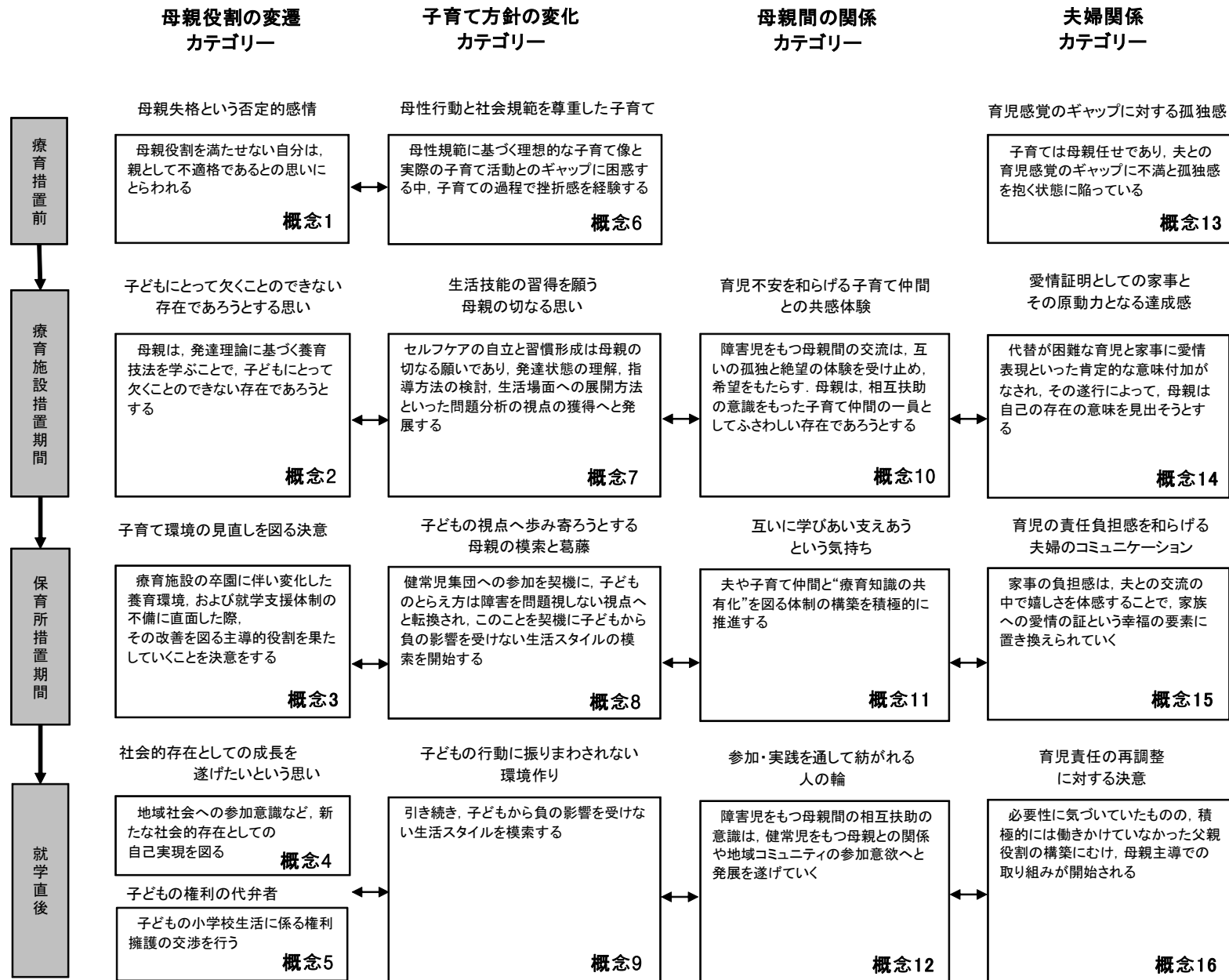


図1 母親としての自信回復プロセスに関わる16個の概念

表1 設問項目 (51項目)

テーマ	概念	項目
母親役割の変遷	概念 1	問 1. この母親は母親役割に対する自信を喪失していると思われる 1, 「何をしてあげたらこの子が喜ぶかといったこともわからず、情けなくなります」 2, 「この子の母親なのに、一日中一緒に過ごすと思うと辛くなることがあります」 3, 「子どもがぐずらずに外出できる母親を見たらやましくなります」 4, 「気軽に相談できる人が居らず、子育てに不安を感じています」
	概念 2	問 2. この母親は子どもにとって良き母親になることに意識を向けていると思われる 5, 「子どものパニックに動じずにいられるのは、子育て支援機関で様々なことを学んできたからです」 6, 「保母さんになったと言われるくらい、子どもへの接し方が上達した」 7, 「子育ての疑問と悩みは、積極的に子育て支援機関のスタッフに聞くようにしています」
	概念 3	問 3. この母親は子どもにとって良好な就学準備環境を整えることに意識を向けていると思われる 8, 「就学に関する本を読んだり話を聴いたりして、子どものために何ができるのかを考えています」 9, 「睡眠時間を削ってでも子どもに合う教材を見つけ、工夫したいと思います」 10, 「ソーシャルワーカー的な人材がいないため、どんな養育・教育法が選択肢としてあるのか見えないことに辛さを感じます」 11, 「親が助けて欲しい時に迅速に助言してくれる相談機関がなくて困っています」 12, 「相談機関には、心身機能の発達指導だけではなく、指導内容を生活面へどう活かすか具体的アドバイスして欲しいと思う」
	概念 4	問 4. この母親は地域社会への参加に意識を向けていると思われる 13, 「地域の人々との関わりは、子育ての不安を軽くしてくれると思う」 14, 「校区の人たちと顔見知りになるため、保育所や幼稚園、小学校のPTA活動に参加しています」 15, 「近所のお友達と一緒に遊ぶ機会が増えるかと思って、子育てサークルへ参加しました」 16, 「自分の子どもだけでなく、地域のお友達の育ちも楽しめる自分になりたい」
	概念 5	問 5. この母親は小学校における子どもの権利擁護にむけた交渉に意識を向けていると思われる 17, 「小学校の先生には個別の指導計画をたてるための専門性がないので助けて下さい」 18, 「親からの希望を伝える時は、先生のやり方に横槍をいれる訳だから、意見の違いで対立しないように気をつけています」 19, 「短くてもいいから連絡帳を使って担任から教室での子どもの様子を聞くようにしています」
子育て方針の変化	概念 6	問 6. この母親は育児書通りの子育てから逸脱できていないと思われる 20, 「お乳を吸う力が弱かったとはいえ、母乳で育てられなかったことに悔いを感じています」 21, 「この子が泣き叫ぶと、周りの視線から逃げるように電車から降りていました」 22, 「この子の発達の遅さを解決してくれるような養育・教育法はないでしょうか」
	概念 7	問 7. この母親は子どものセルフケアの自立にむけた指導に意識を向けていると思われる 23, 「子どもの世話のために家事の手を止めると、いらついたり、きつくあたってしまうので、家で身辺処理の手順を教える際には、責めるような言い方をしないように努めています」 24, 「トイレの問題は特にナイーブだから、成長に合わせて指導の方法を細かく変えています」 25, 「スプーンや食器の選択は、食べこぼしの量を使いやすさの目安にして選んでいます」
	概念 8	問 8. この母親は子どもと母親の関係を見直したと思われる 26, 「他の子より発達が遅いことに不安を感じていましたが、保育所のお友だちと叩きあいながらも遊ぶ姿を見てからは気にしないようになりました」 27, 「子どもにべったりから卒業するために、家庭では親子遊びに加え、子どもが一人で遊ぶ時間を作るようにしました」
	概念 9	問 9. この母親は他の母親とのつながりを得ることができたと思われる 28, 「子どもが自分の思い通りにならないからと八つ当たりしないように、お茶やタバコで息抜きする時間を作るようになりました」 29, 「養育方針は先生の言うことに従うのではなく自分の考えで決めないと、何をやっても後悔すると思うようになりました」
母親間の関係	概念 10	問 10. この母親は他の母親とお互いに助け合っていくことを意識していると思われる 30, 「どんなことでも話せる仲の良い友人がいます」 31, 「助けて欲しいときに助けてって言える友人がいます」 32, 「何かあったときに駆け込める実家の母や友人を持てたことが、私の心の支えになっています」
	概念 11	問 11. この母親は社会参加に意識を向けていると思われる 33, 「美容院や歯医者へ通う時には、互いの家で子どもを預かりあいます」 34, 「母親同士一緒にご飯食べに行く時間を持つようになって、ストレスが減りました」 35, 「家族とお母さん同士が集まれば勉強会が開ける。それを頼って来る人が沢山います」
	概念 12	問 12. この母親は家庭のなかで子育てに対する強い孤独感をもっていると思われる 36, 「自分のことだけで精一杯だったけど、今は周りの人のことも考えるようになって、いろんな人と知りあえる機会が増えたと思います」 37, 「子どもが学校に慣れたらパートでもいいから仕事に就きたいですね」 38, 「正直、働きたくても働けない現状にいるのを悔しいと思うこともあります」
夫婦関係	概念 13	問 13. この母親は育児と家事に自己の存在の意味を見出そうとしていると思われる 39, 「お父さんはお風呂には入れてくれるけど、後は私任せです」 40, 「日頃接してないから、お父さんには育てにくさがピンとこないみたい」 41, 「この子が寝るまで一緒に遊んで、雑用は睡眠時間を削って夜にしていたね…しんどかった」
	概念 14	問 14. この母親は育児と家事の負担感を家族への愛情の証として捉えていると思われる 42, 「役割は分担されているのかな。夫が外で頑張る分、私は家のことを頑張るって」 43, 「この子を育てるのは私しかいないでしょ」 44, 「自分のための時間はなくなったけど、自分に与えられた役割(家事・育児)を果たすことはあたりまえだと思う」 45, 「子ども中心の生活だけ意味のある時間の使い方をしていると思う」
	概念 15	問 15. この母親は育児と家事の負担感を家族への愛情の証として捉えていると思われる 46, 「家族のために使った時間は、きっと家族にいい影響を及ぼすだろうから苦労はいとわない」 47, 「夫から感謝されると明日も頑張ろうかって気になりますよね」 48, 「忙しいからこそね、夫婦で話ししてお互いの苦労を労わる時間をつくるのが大事なの」
	概念 16	問 16. この母親は育児責任について夫との関係を見直したと思われる 49, 「お父さんの子育て役割が育っていればもっと楽だったと、今だから思います」 50, 「お父さんにも子どもとの留守番や、子どもを遊びや買い物に連れて行って欲しいと思う」 51, 「お父さんは昔の私と一緒に、子どもとの接し方が解らないのだとやっとなりました」

表2 調査対象者の内訳

	作業療法士	保育士	理学療法士	臨床心理士	言語聴覚士	看護師	ケースワーカー	合計人数
第一段階	12名 (46.1%)	5名 (19.2%)	4名 (15.3%)	2名 (7.6%)	1名 (3.8%)	1名 (3.8%)	1名 (3.8%)	26名
第二段階	11名 (55%)	4名 (20%)	3名 (15%)	1名 (5%)	1名 (5%)	0	0	20名
第三段階	9名 (64.2%)	2名 (14.2%)	1名 (7.1%)	1名 (7.1%)	1名 (7.1%)	0	0	14名

表3 第一段階 の評定結果

(N=26)

「コンセンサスを得た」項目						「コンセンサスを得られなかった」項目							
テーマ	概念	項目	同意 できる%	同意 できない%	$\chi^2$ 値	テーマ	概念	項目	同意 できる%	同意 できない%	$\chi^2$ 値		
母親役割の変遷	1	1.	88	12	15.384 **	母親役割の変遷	1	3.	58	42	0.615 ns		
		2.	77	23	7.538 **			4.	62	38	1.384 ns		
	2	7.	81	19	9.846 **		2	5.	65	35	2.461 ns		
		3	8.	96	4			22.153 **	6.	54	46	0.153 ns	
			11.	88	12			15.384 **	3	9.	50	50	0.000 ns
	12.	92	8	18.615 **	10.		65	35		2.461 ns			
	4	13.	77	23	7.538 **		4	16.	73	27	5.538 *		
		14.	92	8	18.615 **			5	17.	69	31	3.846 *	
		15.	92	8	18.615 **				18.	62	38	1.384 ns	
	子育て方針の変化	5	19.	85	15		12.461 **	の子育て方針の変化	6	20.	42	58	0.615 ns
6			22.	77	23	7.538 **	21.			42	58	0.615 ns	
7		23.	77	23	7.538 **	8	26.		58	42	0.615 ns		
		24.	88	12	15.384 **		9		29.	69	31	3.846 *	
		25.	81	19	9.846 **				の母親関係	12	38.	65	35
8	27.	88	12	15.384 **									
9	28.	77	23	7.538 **	13	39.	69	31		3.846 *			
	10	30.	88	12							15.384 **	14	43.
31.		92	8	18.615 **	夫婦関係	16	49.	73		27	5.538 *		
32.		96	4	22.153 **					50.			62	38
11	33.	81	19	9.846 **									
	12	34.	81	19	9.846 **	13	40.	81	19	9.846 **			
35.		81	19	9.846 **									
36.		96	4	22.153 **									
夫婦関係	13	37.	92	8	18.615 **	14	42.	77	23	7.538 **			
		40.	81	19	9.846 **		15	44.	77	23	7.538 **		
	14	42.	77	23	7.538 **	45.		81	19	9.846 **			
		44.	77	23	7.538 **		15	46.	85	15	12.461 **		
	45.	81	19	9.846 **	47.	92		8	18.615 **				
	46.	85	15	12.461 **		48.		77	23	7.538 **			
	15	47.	92	8	18.615 **		51.	92	8	18.615 **			
		48.	77	23	7.538 **								
16	48.	77	23	7.538 **									
	51.	92	8	18.615 **									

\*\*p<0.01 , \* p<0.05 , + : 0.05<p<0.10 , ns : 0.10<p



表4 第二段階 の評定結果

(N=20)

① 「同意群」 へのコンセンサスを得た項目

テーマ	概念	項目	同意 できる%	同意 できない%	$\chi^2$ 値
の母親役割 の変遷	2	5.	80	20	7.200 **
	4	16.	95	5	16.200 **
針子の育て方 の変化	8	26.	80	20	7.200 **

② 「非同意群」 へのコンセンサスを得た項目

テーマ	概念	項目	同意 できる%	同意 できない%	$\chi^2$ 値
針子の育て方 の変化	6	21.	20	80	7.200 **

③ コンセンサスを得られなかった項目

テーマ	概念	項目	同意 できる%	同意 できない%	$\chi^2$ 値
の母親役割 の変遷	1	3.	45	55	0.200 ns
	4	4.	45	55	0.200 ns
	2	6.	65	35	1.800 ns
	3	9.	55	45	0.200 ns
	10.	70	30	3.200 +	
針子の育て方 の変化	5	17.	50	50	0.000 ns
	18.	55	45	0.200 ns	
の母親関係 の間	6	20.	45	55	0.200 ns
	9	29.	70	30	3.200 +
夫婦関係	12	38.	55	45	0.200 ns
	13	39.	55	45	0.200 ns
	41.	30	70	3.200 +	
	14	43.	55	45	0.200 ns
	16	49.	55	45	0.200 ns
50.	65	35	1.800 ns		

\*\*p<0.01 , \* p<0.05 , + : 0.05<p<0.10 , ns : 0.10<p

表5 評定コメントの具体例

概念	項目	コメントの具体例
コメントA	設問項目全般に対するコメント	読む度に同意する，同意しないが変わってしまった  発言をあれこれイメージして膨らませた
コメントB	設問項目全般に対するコメント	自分の基準により捉え方が変わった
13	39. 「お父さんはお風呂には入れてくれるけど，後は私任せです」	一般家庭ではよくあること
1	3. 「子どもがぐずらずに外出できる母親を見るとうらやましくなります」	自信を喪失しているかどうかはこの発言だけではわからない
3	10. 「ソーシャルワーカー的な人材がいないため，どんな養育・教育法が選択肢としてあるのか見えない ことに辛さを感じます」	バックグラウンドが見えないので同意するとは言えない
5	18. 「親からの希望を伝える時は，先生のやり方に横槍をいれる訳だから，意見の違いで対立しないように気をつけています」	対立はあっても避けてはいけない／方法論としては迂遠的
13	41. 「この子が寝るまで一緒に遊んで，雑用は睡眠時間を削って夜にしていたね・・・しんどかった」	一緒に遊んでいたらダメ

Validity of the child-nurturing empowerment questionnaire  
for mothers of mentally disabled children.

By

Masanori Ariyoshi, MSOT, OTR <sup>※1※2</sup> Takashi Yamada, PhD, OTR <sup>※3</sup>

From

<sup>※1</sup> Hyogo University of Health Sciences

<sup>※2</sup> Tokyo Metropolitan University of Health Sciences, Graduate School

<sup>※3</sup> Tokyo Metropolitan University

We developed a questionnaire for clarifying the state of independent child-nurturing that was beneficial for mothers of mentally disabled children in overcoming the psychological crisis in childrearing. The question items were created, and the content validity was verified.

The 51 question items corresponding to 16 concepts that are important for mothers to regain confidence in childrearing were originally made from the preliminary research outcome that made mentally disabled children's mothers subjects of the investigation, and the validity of the content was examined in accordance with Delphi process.

As a result, 35 items finally obtained the consensus of "Agreement".

The question items examining the construct validity were made by this research, and the possibility of questionnaire development was realized.

Key words : Mother guidance, Mentally disabled child, Evaluation,  
Health Promotion